

# ベルクソンにおける「具体性」について

——『直接与件』から『進化』まで——

北 夏子

○ はじめに

本稿は、十九世紀のフランスの哲学者であるアンリ・ベルクソン (Henri Bergson) による『意識の直接与件に関する試論 (Essai sur les données immédiates de la conscience)』(以下『直接与件』と略記) から『創造的進化 (L'évolution créatrice)』(以下『進化』と略記) までの諸著作をとりあげ、彼が「具体的な (concret, concrète)」という言葉をとどのよう使用しているか、そしてその具体性によって示されているものは何かを検討することによって、彼の思想的深化を辿ろうと試みるものである。本稿においてもまた、ベルクソン哲学についての次の様な基本的な立場を踏襲することになるであらう。

ベルクソン哲学はしばしば生の哲学と呼ばれる。それは

次のような理由による。『創造的進化』によって彼は世界的に有名な哲学者となつたのであるが、この著作はそれまでの彼の仕事の総決算という意味合いを持っていた。『進化』は『意識の直接与件に関する試論』の持続論と『物質と記憶』の心身論が開いた哲学的ヴィジョンを、後者の著作が準備した「生命」というテーマに定位しつつさらに深め、同時に前者の著作に含まれていた「直観」の方法を生命理論によつて根拠づける試みだからである。ベルクソン哲学がふつう哲学史のなかで生の哲学として位置付けられるのは、『進化』が彼の哲学の一つの到達点と見なされているからであり、そう見なしでよい理由があるからである。<sup>1)</sup>

本稿の試みにおいてもまた、『進化』という著作が、それまでのベルクソンの仕事の総決算と呼ぶに値するものである

ことが示されるであろう。

具体性に注目してベルクソンの諸著作を振り返ってみると、具体的などという形容詞が伴って示される側に、ベルクソン哲学の主題とされているものがあることを確認することができる。後で詳しく見るようになるが、それは例えば、『直接与件』においては、<sup>(1)</sup>具体的な持続(D164,165,179,180)、<sup>(2)</sup>具体的時間(D185,165)、『物質と記憶』においては、<sup>(3)</sup>具体的知覚(MM31,140,203,246,278)、『進化』においては、再び<sup>(4)</sup>具体的持続(EC17,22,362,368)、そしてまた再び<sup>(5)</sup>具体的時間(EC21,241)、あるいは<sup>(6)</sup>具体的な実在(réalté)(EC46,246)といったように述べられているものである。

具体性の対義語として想定されるのは抽象性である。<sup>(7)</sup>抽象的などという形容詞は、抽象的な時間(D185)(EC21)、あるいは、抽象する能力(D172,73,75)等々といったように使用されている。このように抽象性について述べるベルクソンは、抽象性に、ベルクソン哲学の主題に対する横槍としての役割を担わせているかのように見えなくもない。ベルクソンの本質的な主張をダイレクトに示すための具体性と、その主張への足がかりとしての抽象性という構図が浮び上がりそうではある。また、『物質と記憶』で、ある意味で、存在の客観性を保障する思考を否定しないベルクソンを考えれば、ベルクソンが具体性について述べる意図は、それとは逆である

可能性もあろう。つまり、抽象性を示すための足がかりとしての役割が与えられているのが、具体性である可能性もあろう。いずれにせよ、ベルクソンは具体的などという形容詞を繰り返し用いているということは事実である。それは、ただの惰性的な繰り返しなのだろうか。それとも、その繰り返しには何らかの意図があるのだろうか。本稿は、ベルクソンによる繰り返しにはそれなりの意図があるとする立場をとることになる。そして、ベルクソン哲学に深化が見られるとすれば、それは、この立場を暗黙裡に前提してもいることもまた結論部では示したいと思う。

本稿を論じるにあたり、『進化』までのベルクソンの諸著作を出版された順に確認しておくことにしよう。一八八八年『意識の直接与件に関する試論』、一八九六年『物質と記憶(Matière et mémoire)』、一九〇〇年『笑い(Le rire)』、一九〇七年『創造的進化』、以上である。

本稿は、『直接与件』、『物質と記憶』、『進化』と、出版された順に辿ることにする。そして、それぞれの著作において具体的などという形容詞がどのように使用されているかを見ていく。では、『直接与件』から始めることにしよう。

## 一 『意識の直接与件に関する試論』における具体性について

『直接与件』では、具体的なという言葉が頻繁に用いられている。言葉の数にこだわる必要はないのかもしれない。しかし、前に述べたことを繰返せば、このように同じ言葉、ここでは具体的な、そして、抽象的なという形容詞が繰返し使われているのにはそれなりの理由があるとも考えられよう。

『直接与件』における具体性について詳しく検討するために、具体的時間と抽象的時間とがすりあわせられ、また具体的空間、そして持続について述べられる、エレアのゼノンのパラドクスについて書かれる箇所を引用し、検討することにしよう。

どうしてアキレスは事実亀を追いこせるのか。それはアキレスの一步一步、亀の一步一步が運動たるかぎり不可分のものであり、空間たるかぎりでは異なる大きさだからである。だから歩みを加え合わせれば、アキレスが通過した空間としては、亀が通過した空間と亀がもっていたアキレスに先行するへだたりとの総和を上回る長さがほどなく得られることになるだろう。「…」それで、現代の一思想家による鋭く深い分析の後でも、われわれは

ふたつの運動体（アキレスと亀）の出会いが、現実の運動（mouvement réel）と想像上の運動とのあいだ、空間それ自体と無限に分割可能な空間とのあいだ、具体的時間（temps concret）と抽象的時間（temps abstrait）とのあいだ、にある隔たりを示すものであるということとを認めることが必要だとは信じない。直接的な直観（intuition immediate）が、運動は持続（durée）の中にあり、持続は空間の外にあることを示してくれるのに、空間や時間や運動の性質についていかに巧妙なものにもせよ形而上学的仮説などをどうして援用する必要があるうか。（D18485）〔省略、括弧内捕捉、引用者〕

ゼノンは想像上の運動と、無限に分割可能な空間と、抽象的時間とを想定することによって、ベルクソンのいう隔たりを生み出し、パラドクスを作ったといえよう。ベルクソンはこれらの想定に対して、直接に批判を加えるのではなく、あるいは、具体的なものをここで擁護するのではなく、新たな道具立てを用意しているように見える。すなわち、持続である。この引用部は以下のように続くのだが、以下においてもまた、新たな道具立てとして持続が持ち出されているかのようである。

具体的空間 (espace concret) の分割可能性に限界があるとする必要などはいささかもない。実際は空間の中にある、二つの運動体の同時的な位置とそれらの運動体の運動とのあいだに区別をつけておきさえすれば、空間は無限に分割できるものとしておいてよい。その運動自体は空間を占めることはできず、延長〔広がり〕よりもむしろ持続 (durée) であり、量ではなしに質である。

(D185)

ベルクソンはこのように述べるのだが、なぜ、このような述べ方をするのかを考えたい。先にあげた引用部も含め、ここでの叙述を検討してみよう。ベルクソンは新たな道具立てとして、持続を導入している。持続に対立するものとして、想定されているのは、空間、位置、量であるだろう。このような対立から見た、ベルクソンによって述べられる具体性とはどのようなものとして捉えられるだろうか。注意されておいてよいのは、質を帯びないという意味で持続と対立せられる空間にも、具体的などという形容詞が付されることである。

そこで、ベルクソンが具体的などという語を使う場面により近づいて吟味することにする。

ベルクソンは「具体的な時間」と「抽象的な時間」ということを述べている。また、「具体的な空間」ということを述

べるに際しては、「分割可能性に限界がある必要がない」ということについて述べている。この他の箇所における具体性の用い方へも手を伸ばしてみよう。すると具体的なベルクソンが形容する場面においては、それが時間的な関係において把握されるものとして、そして、私たちに對して近しいものとして、表されているように思われてくる。ただし、一見してそれと分かるものばかりではない。例えば、「具体的觀念の組織 (contexture de l'idée concrète)」(D100) が、時間的な性格を帯びた觀念の組織であるとは、一見したところでは、それとは見えにくい。ゆえに、この箇所ですべられる場面に注目し、検討することにする。

觀念を構成する諸要素のこうした分断は、抽象へと至るものであり、きわめて便利であるため、われわれは日常生活や、更には哲学的議論においてさえ、これなしで済ますることができないほどである。しかし、分断された諸要素こそまさに具体的觀念の組織に参入するところの要素であると想像したり、また、實在的諸項の浸透をそれらの象徴の併置に置き換えることで、持続を空間によつて再構成すると称する場合、私たちは不可避免的に連合主義の誤謬に陥ってしまう (D100)

ベルクソンは、ここで、「分断された諸要素」が「具体的觀念の組織に参入する要素であると想像すること」は、「持続を空間によつて再構成すると称する」ことであると述べ、そうすると誤謬に陥つてしまうと述べている。この箇所でも、先に見たように、持続と空間とが、対立するものとして述べられている。ここでは、具体的觀念の組織は、持続の厚みを帯びるものであるだろうことを読み取ることができよう。その具体性は、抽象に対して、一方向的な關係をしか持たない。つまり、「持続を空間によつて再構成する」ということはできない關係にある。連続性を断たれた諸要素によつて、連続性を回復することの不可能性が示されていよう。とすれば、ここで具体的など語られる性格とは、連続性であり、そのような述べ方をするのは、以下のような事態がとらえられていることに理由があると考えられる。

感知できないほど微妙な段階を経て、諸要素がそこで相互浸透するような具体的持続 (*durée concrète*) から、諸瞬間が併置されるところの記号的持続へ、したがって、自由な活動から意識を伴った自動運動への移行がなされる (DI180)

日常生活のうちに生じる事態は、「具体的な持続」に本源があつて、それが移行するのは「記号的な持続」の方向である。とすれば、具体的と形容されるものは、私たちの生にとつてより近いもの、より親密であるものを示していると考えられる。そして、この親密さは、時間的な關係において捉えられる親密さであると考えられる。このことは、ベルクソンが「具体的な」と形容する場合に、「生きられる」とも形容することがあることから汲み取ることができるだろう。

ところで、なぜベルクソンはこの「具体的な」という形容詞を、私たちの生にとつてより親密なものを示すために、私たちに対して、用いることができたのだろうか。ベルクソンの書き方を振り返つて、ベルクソンがアキレスと亀のパラドクスについて述べる際に、「現実<sup>①</sup>に追いつき(追いつかれ)、追い越す(追い越される)アキレス(亀)」が「具体的な時間」のうちに、述べられていたことを思い出そう。このような書き方は、そのような運動が現実<sup>①</sup>に起きているということが、既に私たちのうちで同意<sup>②</sup>されている事柄だということを示しているかのようである。つまり、具体性とは私たちのうちで既に分かちもたれているがゆえに、訴えかける対象となり得るものであるのではないか。そしてまた、この具体性とは、私たちの内で既に分かちもたれてしまっていることを指

示するという性格をもつがゆえに、様々な言葉を尽くしてその内実を述べようとしてもし尽くせないものでもあるだろう。だから、ベルクソンは『直接与件』において主張しようとするものの側に具体性をもたせてはいるのだが、その主張を述べるためには、具体性に対する抽象性、あるいは形式としての存在様式<sup>(9)</sup>について批判を加えることに依らざるを得なかったと考えられる。『直接与件』において確保されているのは、私たちがいて生きられる具体性である<sup>(9)</sup>と考えることができるだろう。

## 二 『物質と記憶』における具体性について

一では、『直接与件』における具体性について考えるのに、主に、ベルクソンによるエレアのゼノンのパラドクスについての議論を検討した。そこで見えてきたのは、具体性が、時間的な関係において、私たちにとって親密である事態を示しているということ、そして、具体性の公理的な性格であった。公理的ということとは、すなわち、数学は私たちにおいて公理としてのある種の同意を前提として成立しているのだが、その同意された事柄について私たちは説明することができないというように、説明不可能な性格を備えているということである。

続いて、『物質と記憶』における具体性について検討するにあたり、軸を、ベルクソンが数学的な点に関連する事柄、そして、時間に関連する事柄について考察する箇所を設定したい。そのねらいは、「具体的な」という形容詞がある特定の場面で使用されていることを示すことによって、諸著作を貫くある傾向を示せるのではないかと考えるからである。以下引用し、検討していくことにしよう。

実際、意識の受け入れる、現在の実在の具体的微表 (marque concrète) をまず定義するのではなければ、過去の状態の記憶を特徴づけようとつとめてもむだであろう。現在の瞬間とは、私にとつていかなるものか。時間の特性は流れるところにある。すでに流れた時間は過去であり、時間が流れつつある瞬間を、私たちは現在と呼ぶ。しかしここで問題なのは、数学的点 (instant mathématique) ではありえない。なるほど、たんに考えられるだけの観念的現在というものもあって、過去と未来とをへだてる不可分な境界 (limite indivisible) をなしている。しかし現実の、具体的な (concret) 、生きられる現在、私が、私の現在の知覚について語るときに語っているもの、これは必然的に持続を占める。

(MM152)

この箇所で、具体的な現在<sup>(10)</sup>は、数学的な点として考えられる観念的現在としてではなく、現実<sup>(11)</sup>に生きられる現在として示されている。持続を導入している点は、『直接与件』における論じ方を思い出すことが出来よう。

ではこの持続は、どこに位置するのだろうか。それは、私が現在の瞬間 (instant présent) を考える時に、観念的に規定する数学的点 (point mathématique) のこちら側にあるのだろうか、向こう側にあるのだろうか。それは同時にこちら側にも向こう側にもあるということ、私が「私の現在」と呼ぶものが、同時に私の過去にも未来にもくい行っていることは、あまりにも明白である。[… ]だから、私が「私の現在」と呼ぶ心理的状态 (état psychologique) は、同時に直接的過去の知覚でもあり、直接的未来の限定でもあるのでなくてはならない。〔省略引用者〕 (MM152-3)

ベルクソンは、現在を、過去と未来について語ることによって定義しようとしている。すなわち、単なる過去としても語れず、単なる未来としても語ることができないものとして、過去と未来とに食い入る瞬間として語っているのだ。

ある。続く箇所では、過去と未来とが、感覚と運動として言い換えられ、現在が身体と結び付けられる。引用しよう。

ところで直接的過去は、知覚される限りにおいて、のちに見るように、感覚である。というのも、あらゆる感覚は、要素的振動の非常に長い継起をあらわしているからだ。また直接的未来は、自己を規定する限りにおいて、行動あるいは運動である。だから私の現在<sup>(12)</sup>は、同時に感覚であり運動でもある (à la fois sensation et mouvement)。そして私の現在<sup>(13)</sup>は、不可分の全体を形づくるから、この運動はこの感覚に隣接し (le mouvement doit tenir à cette sensation)、これを行動へと延長する。そこから、私は、私の現在<sup>(14)</sup>が、感覚と運動の結びついた体系 (un système combiné de sensations et de mouvements) からなることを結論する。私の現在<sup>(15)</sup>は、本質上、感覚—運動的 (sensori-moteur) なのである。これはつまり、私の現在<sup>(16)</sup>が、私の身体についても意識にあるということである。

(MM153)

ベルクソンは感覚と運動として過去と未来を言いかえ、現在を感覚—運動的なものとする。現在をこのように感覚—運

動的なものとするまでのベルクソンの文章の運びを見ると、まず、感覚と運動とが、*etc.* で並べられ、続いて *tenir as* と関係付けられ、*systeme* とされた上で、*é* を用いることによって一体化される。ただ、ベルクソンは *é* を用いることによって過去と未来との隙間を最小限埋めようとしても、その間隙のある点として表現することで全く観念化してしまうことは避ける。その代わりに、ベルクソンは「身体」について語りだす。このような語り方をすることによって、現在を数学的な点として語ってしまったのは、現在の瞬間における豊かな内実を取りこぼしてしまうということを指し示しているかのように見える。具体性に関していえば、具体的なものとは身体的なものと関連付けて捉えられていると考えることができる。というのも、ベルクソンが具体的徴表として述べる現在とは最終的には *é* を含む感覚—運動的なものとして描かれるところにあり、それは、感覚と運動とが一体として述べられる身体に含意されていると考えられるからである。

### 三『創造的進化』における具体性について

二で論じた『物質と記憶』における数学的点をめぐる議論は、これから論じようとする『創造的進化』においても見られる議論である。それは、心的な性質 (nature

psychologique) をもつものとしての私の人格について述べられる箇所である。心的性質ということから、二で、「私の現在」が心理的状态であるとして書かれていたことが思い出されよう。この箇所では、心的性質ということと私の人格ということが関連付けられる。では、引用しよう。引用はまず、生命がはずみとしてとらえられるところから始まる。

生命は当然はずみ (zén) に比較される。というのも、物理の世界からイメージをかりるとすれば、はずみほど生命に近似した観念を与えうるものはないからである。とはいえそれはイメージにすぎない。生命はありのままには心的な筋合いのもの (ordre psychologique) であり、そうして心的なものは多数の項を渾然と相互透入したままつつみこむ本性をもつ。(EC258)

生命の本性とは「つつみこむ」ものであるとベルクソンが述べていることを確認したい。生命は、数学的など呼ばれるような可分的な性格を備えるものとしては示されない。生命は多数の項をつつみ込むものとして描かれるような豊かな内実を含むものなのである。

前の引用部に続くのは、一と多の議論である。



空間において、空間においてのみ、疑いもなく、分明な多 (multiplicité distincte) というものが可能である。すなわち点 (point) は絶対に他の点の外にある。しかしまた、純粹かつ空虚な一 (unité) というものも空間内でしか出会えない。それは数学的な点の一 (un point mathématique) なのである。抽象的な一と多 (unité et multiplicité abstraites) は空間の限定となくとも知性のカテゴリーと解してもよく、空間性と知性の性とはたがいにかぎらずになっている。(EC258)

ここでもまた、二で述べた数学的点について思い出すことが有効であろう。『進化』においてもまた数学的点とは、可分性の象徴として、そして相互外在性という性格を備えたものとして論じられている。以下に続く。

ところが、心的性質 (nature psychologique) のものは空間にびったりとは当てはまらないし、知性の枠にもそっくりとおさまらない。私の人格はある与えられた瞬間に一 (une) であろうか、それとも多 (multiple) であろうか。それを一 (une) だと言いきると内なる声が現れて、抗議する。それは、私の個性を分けもっているさまざまな感覚、感情、表象の声である。しかし人格を

分明な多 (multiple) にすると、私の意識がおなじように強く反抗する。意識は主張して、私の感覚や感情や思想は私が自分に施した抽象であり、私のどんな状態にも他の状態がごとごとく含まれているという。してみると——知性だけが言語をもつのだからどうしても知性の言語を取り入れるほかないとして——私は多なる一であり一なる多なのである (unité multiple et multiplicité une)。けれども一や多 (unité et multiplicité) は自分のカテゴリーを私に差し向けている知性によって私の人格に対してとられた眺めにすぎない。私は一と多のどちらにも入らないし、両者をあわせたものの中にも入らない (je n'entre ni dans l'une ni dans l'autre ni dans les deux à la fois)。とはいえ、両者をもとどおり結合すれば、あの相互透入や、私自身の底に見出されるあの連続を近似的に真似てみせることはできよう。私の内的生命とはそのようなものであり、生命一般もまたそうしたものなのである。生命は、物質との接触においては、衝力ないしはずみにくらべられ、生命そのものとして考察するならば莫大な潜在力であり、幾百幾千の傾向の相互侵食である (EC258-9)

明らかであると思われるのは、ベルクソンが数学的な点を

批判するのは、数学的な点がベルクソンが確保しようとする現在としてとらえられるある間隙とは別の性格をもつからである、ということである。その間隙は、一や多などの相互外在的な性格をもつ視点からは捉えることができない。はすみ、あるいは人格ということ述べることによって確保されるものである。ところで、この数学的点とは別のものである間隙は、『進化』のなかでは、どのように引き継がれ、述べられていくだろうか。ここで引用した箇所とは前後するのだが、ベルクソンが、「具体的なかたち (forme concrète)」として導入する「共感」について述べる箇所を検討することにした。というのも、共感ということを導入するのを見ることが、ベルクソンが間隙を、厚みを帯びたものとして維持していこうとするさまを見て取ることができるからである。

ベルクソンが「具体的なかたち」について言及するのは、アナバチと青虫について考察する箇所である。このテーマは、一見、私たちとは関係付けられにくいように見えるテーマではあるだろう。しかし、ベルクソンは、このテーマを用いて、「共感」について周到に語っているように見えるのである。

アナバチは自分の獲物をとらえるのに、一息に獲物を麻痺させられるような急所をつく。アナバチが、昆虫学者のように、ここをこう刺したら青虫は麻痺するのだというような急

所をひとつひとつ学びとっていると考えることは困難である。このような困難を避け、アナバチと青虫との関係について語るために、ベルクソンは次のように続ける。以下引用しよう。

アナバチと餌食のあいだに（言葉の語源的な意味での）共感 (sympathie) を想定するならば、事情はもはや同じではないだろう。この共感がいわば内側から青虫の傷つきやすさを教えるものとするのである。この傷つきやすさについての感じは、外的知覚には何一つ負う所がないかもしれない。それはアナバチと青虫とがひとつところに持ち出されて置かれた、というだけのことから生ずるのかもしれない。その場合、アナバチと青虫とはもはやふたつの有機体としてではなく、ふたつの活動 (activities) としてみなされている。両者の関係を具体的なかたち (forme concrète) にあらわしたものが、この感じなのであろう。もちろん、科学の理論はこの手の考察に訴えることはできない。科学の理論は行動 (action) を有機組織よりも前に、共感 (sympathie) を知覚や認識より前に置いてはならない。しかし繰返せば、ここに、哲学が見るべきものは何一つないか、それとも哲学の役割は科学の役割の終わるところに始まるかである。

## (EC175)

この具体性とは、音楽の主題のように、言葉に表現することができないとされる。そして、共感として描かれるこの具体性は、私たちと無縁なものではない。ベルクソンはこう続けるのだ。「感情の現象や反省をともなわぬ共感・反感 (sympathies et antipathies) などにおいて、私たちは昆虫が本能によって行動する際その意識のなかに起こっているに違いないものを、それよりはずっと漠然として知性のにじみこみすぎてもいる形でながら、自分たちのなかにいくらか体験する」(EC176) 私たちのうちにも共感としての具体性は息づいている。「アナパチの方は実際僅かしか、自分に利害のあるところだけしか掴まない。しかし少なくとも内側からそれをつかむ。そのつかみ方は認識過程によるのはまったく別で、ある直観による。それは表象されるよりはむしろ生・き・ら・れるもので、おそらく私たちのあいだで物事を見抜く共感 (sympathie divinatrice) と呼ばれるところのものに似ている」(EC176-7)。そして、本能に関して、「具体的な説明 (explication concrète) はまったく別の道に求められなければならない。それはもはや科学的ならぬ哲学的な説明であり、もはや知性の方向ではなく「共感 (sympathie)」の方向に見出される (EC177)」と述べられる。

共感とは何か。共感とはすなわち、あるものに属すると同時に、あるものが属する事態をこそ指し示すのではないか。このような共感は、これまでに述べきたベルクソンの文脈の中ではどの様に位置づけられるだろうか。具体的なものとは私たちにおいて成立しているある同意を意味し、時間的な関係において、私たちに親密なものであり、身体に含意されているものであった。共感に、具体的なかたちという表現が与えられているのは、共感が時間的な性格を持つということ、時間的な性格のうちで捉えられるものでもあることを示していると考えられるのではないだろうか。先に引用したが、具体的なものが生・き・ら・れるものであると述べられるのと同じように、共感が「表・象・さ・れるよりはむしろ生・き・ら・れるもの」と述べられることから、時間的な性格のうちで捉えられている可能性は高い。そして、具体的な説明が哲学的な説明であるとされるのであれば、時間的な性格のうちでものごとを捉える努力、このことをベルクソンは哲学のうちにみていると考えられてくる。

『進化』における更なる間隙への対処を見よう。それは、ベルクソンが画家による創作について述べる箇所に見われているように思われる。その箇所を引用しよう。

画家がキャンバスに向かい、絵の具がパレットになら

び、モデルはポーズをとっている。私たちはそうしたことを全てを見ており、またその画家の手法も知っている。キャンバスの上に現われるものを私たちは予見できるだろうか。問題の要素は、私たちが握っている。どんな風にその問題が解かれるか、抽象的な知識 (connaissance abstraite) としては、肖像画がモデルにも芸術家にもきつと似るであろうことから、私たちは知っている。けれども、具体的な解答 (solution concrète) は、あの予見不可能な、芸術作品の一切たる何ものでもないもの (rien) をともなっている。そしてその何ものでもないものが時間をくう。質料的に無なるもの、それが形態として自己を創造する (Néant de matière, il se crée lui-même comme forme)。その形態の芽生えと開花は縮小可能なひとつの持続となつてながく伸び、持続はそれらと一体をなしている。自然の作品についても同様である。そこに現われる新しいものは内なる衝力から発する。衝力は進歩ないし継起であつて、継起に固有な力を与え、あるいは力をことごとく継起からもらう。とにかくそれは継起を、ないしは時間における連続的な相互浸透を、空間における瞬間的な単なる並置に還元させなくしているものである (EC340)

この箇所における「何ものでもないもの」が「質料的に無なるままに、形態として自己を創造する」とベルクソンが述べるのを見ると、先ほど検討した、「共感」という関係としてのかたち (forme) から、ベルクソンが一步踏み出しているように見える。その形態を創造するのは、「何ものでもないもの (rien)」である。それは、キャンバスの上にあられる、画家の手から生み出された作品としての具体的な解答とともにある。新しいものを創造するものとしての衝力は、具体的な解答として生み出されるものが持つ時間的な性格を、空間的な性格から区別するものである。ベルクソンは具体的なものを生み出す原理について述べるのであるが、その原理は、具体性を具体性たらしめる、時間的性格を与えるものである。何ものでもないものとして述べられるものが、自己を創造すると語られることによって、ベルクソンは、具体性を成立させるものを示そうと立ち回っているように思える。『進化』においてベルクソンが取り出して見せたのは、具体性を成立させている条件であると考えてる。

#### 四 おわりに

以上の考察をまとめよう。『直接与件』における具体性とは、時間との関係において私たちに親密な、私たちにおいて

既に同意されてしまっているなにかを示す役割を果たしており、『物質と記憶』では、具体性とは身体に含意されているものであることが示され、そして、『進化』では、あるものに属するものでありながら、あるものが属する共感という事態、そして、創造の原理が導入されるための装置として、具体性が描かれているというように考えることができる。

そこで問わなければならないのは、このように具体性について検討してきた結果、ベルクソンの思想の深化がみられるとしたら、それはどこに、という問いであろう。ここで、ドゥルーズの次の言葉を思い出そう。「持続・記憶・エランⅡヴィタルは、ベルクソンの哲学の三つの大きな段階(cépage)を示すものである」<sup>(1)</sup>。ベルクソンが述べている具体性について検討すると、その「具体的なもの」が、私たちの生にとって親密な相に位置し、私たちにおける生の基調をなしていると考えられた。その基調は、『直接与件』ではそのものとして表れ、『物質と記憶』では、そこから物質と精神という二つの實在が証明される、記憶が浸透している知覚をとまなう現実的姿としての身体に表れ、『創造的進化』では生命原理を導くための装置として表れていた。ドゥルーズの言う、ベルクソン哲学における三つの大きな段階は、この基調に関係付けられると、私たちに對して、ベルクソン哲学の

深化として表れてくるであろう。そして、それらを深化としてとらえるということは、私たちに對して分かちもたれていある基調が前提とされていたということでもある。そして現実における深みを捉えさせることに成功しているとすれば、ベルクソンにおいて具体性について繰り返し述べられているのは、私たちをつなぎ止めておくある一定の相が確保されるためであつたとも思われてくるのである。

以上を本稿における結論とし、ひとまず、考察を終えることにしよう。

#### 註

- (1) 石井敏夫、「ベルクソンの「閉じた社会」論」、『ベルクソン化の極北 石井俊夫論文集』、理想社、二〇〇七、p88。
- (2) ベルクソンの著作の引用には以下の略号を使い、その略号と頁数を括弧で括って示す。頁数は、現行の Presses Universitaires de France の Quadrige 版に拠る。  
DI=Essai sur les données immédiates de la conscience  
MM=Matière et mémoire  
EC=L'évolution créatrice  
(3) 「具体と抽象」単純なものと複雑なもの、事実と法則、の關係」(DI106)
- (4) 杉山氏は、「持続」に對立するのはいったい何か、という点。もちろんそう問えば簡単に應じ得る。例えば空間、位置、同時性。」と述べ、更に続けて、次のように述べている。「しかし最も突き詰めたところで言えば、それらのいつたい何が、「持続」と對立するのか。私たちの見るところ、ベルクソンが掲げる對立は、未完了と完了のそれである。本質的なのはこの点であつて、空間や位置や同時性が例えば「質」を有さないとか、それらは延長して

- いる、あるいは瞬間的である、などといった論点は、もちろん無関係ではないにせよ、二次的なものに過ぎない。空間が無限に分割可能であるというのは確かだが、その「ちよもベルクソン」においては空間の非生成性、不動性からの系として理解されている。「杉山直樹『ベルクソン 聴診する経験論』、創文社、二〇〇六年、p.78」
- (5) 「具体的な多数性 (multiplicité concrète)」(D154) 「具体的な方向 (directions concrètes)」(D172) 「具体的な持続 (durée concrète)」(D175, 164, 165, 180) 「具体的意識 (conscience concrète)」(D187) 「具体的觀念の組織 (contexture de l'idée concrète)」(D1100) 「具体的で生き生きとした自我 (moi concret et vivant)」(D1104) 「具体的自我 (moi concret)」(D1104, 126, 165) 「具体的な実在の総体 (ensemble de la réalité concrète)」(D1114) 「具体的な実在 (réalité concrète)」(D1117, 132, 143, 154, 178) 「具体的な現象 (phénomène concret)」(D1123) 「具体的運動 (mouvement concret)」(D1136) 「具体的な心理的諸事実 (faits psychologiques concrets)」(D1149) 「具体的な質 (qualités concrètes)」(D1154) 「像の具体的なかたち (forme concrète d'images)」(D1155) 「具体的な存在 (existence concrète)」(D1156) 「具体的な時間 (temps concret)」(D1165) 「現実的で具体的な私たちの持続 (notre durée réelle et concrète)」(D1179)
- (6) 「物質と記憶」の「六版以前の序によれば、前著の『意識の直接与件に関する試論』は、『内的生』の『移ろいやすい本源の姿をとらえようとした』(C1491) ものである。だが、この著作ではそれと同時に、日常生活のうちでは、『具体的な持続から……記号的な持続へと……それと気づかれぬほどに徐々に移行してゆく』(D1180) という事態が、それと並行して生ずる事態、すなわち『自由な活動から意識のある自動現象へと』(D1180) 同じような仕方で移行してゆく事態とともに、見据えられてもいた。だから、前著にはすでに、『精神生活』が、その『本源の姿』を最も深い音色として、『様々な音色』で響いていたと見てよい。(冒頭括弧内補足引用者) 石井敏夫『ベルクソンの記憶力理論——物質と記

- 憶』における精神と物質の存在証明」、『理想社、二〇〇一』p.121. なお、引用した箇所においてCで示されているのは『Œuvres, Édition du Centenaire, Presses Universitaires de France』である。
- (7) 続く『物質と記憶』においてではあるのだが次のように述べてられていることは注意されてよいだろう。「ところで、こうして現実 (réel) を区分する (diviser) ためには、私たちは現実が任意に区分できることを必ず納得 (persuader) していなければならない。」(MM235)
- (8) 「アリストテレスの場所論 (Quid Aristoteles de loco sensiti)」の中で、具体的なものについても言及する文脈で、ベルクソンは次のように述べている。「[われわれが呼ぶところの] 数学的という他の『存在』様式は、『…』質料から分離された形式からなるものである [括弧内補足、省略、引用者]」(M52)
- 「アリストテレスの場所論 (Quid Aristoteles de loco sensiti)」からの引用により、引用箇所はMを略号として用い、頁数を括弧で括弧で示す。ラテン語についてはFalcon, 1889. を参照。
- (9) 「ベルクソンが確保したのは、ほとんど質量的ともいえる生成が何の支えも必要としないままに継続していくという光景である。いや、外的な視点などはないのだから、私たちは、光景というよりむしろ端的に感じられる体験と言った方がよい。こうした非志向的な感受的経験の質的なリアルタイムの生成——そこにおいて私たちは、消し去りようもなく自分自身の生を生きている。」杉山、前掲書、p.108。
- (10) 石井氏は、「数学的な」という形容詞について次のように述べている。「『数学的な』という形容詞は、觀念の上で限りなく分割されているという事態を言い表している」と解すべきである。」石井、二〇〇一、p.114。
- (11) Gilles Deleuze, *Le bergsonisme*, PUF, 1996, p.1.